徳島県立博物館 No. 27

博物館NEWS ニュース

シオマネキ
（吉野川河口住吉干潟：徳島市）

吉野川河口のヨシの生えている泥干潟には、様々なカニがすんでいます。中でも目立つのがシオマネキです。写真のように、オスの片側のハサミがひじょうに大きいのが特徴です。

泥干潟は、埋め立てや改修により、全国的にたいへん少なくなりました。それに伴いシオマネキの生息地もかなり減ってしまいました。吉野川河口では、シオマネキをまだ普通に見かけることができますが、他の地域では珍しいことです。

企画展「吉野川の自然」より。

佐藤陽一（主任学芸員：脊椎動物担当）

沖縄・熊野信仰・補陀落渡海

長谷川賢二

はじめに

1988年の秋、当時大学院生だった私は、研究室旅行で沖縄を訪ねたことがあります。沖縄県立図書館内の沖縄史料編集室を訪問して論文や史料写真をめくっているとき、「熊野」という文字が目に飛び込んできました。熊野先達を中心とする山伏の動向を研究していたので、沖縄に熊野信仰（和歌山県にある熊野三山の神仏をめぐる信仰）が伝播していたということに、興味をそそられましたが、そのままになっていました。

それから7年たった1995年10月、再び沖縄を訪れる機会を得たので、霊場や関係史料について知りたいものだと思い旅立ちました。幸い、沖縄宗教史がご専門の小島瓔禮氏（琉球大学教授）に多くのご教示をいただくことができました。以下、そのときの見聞や文献によりながら、沖縄の熊野信仰について述べてみたいと思います。

沖縄の熊野信仰霊場

熊野信仰と沖縄というと、いささか奇異な感じがあるかもしれません。私たちの沖縄に対するイメージは、とかく「異国」的な側面に傾きがちだからです。確かに、近代初頭の「琉球処分」まで、沖縄には琉球王国という独自の国家があり（すでに江戸時代に薩摩藩の支配を受けていましたが、王国は存続しました）、15～16世紀をピークに日本本土を含む東アジア・東南アジアの広い範囲での交流が行われていました。その中で沖縄文化がはぐくまれてきたわけですから、「異国」的なイメージは当然のことです。しかし、広範な文化交流ということを考えれば、本土から流入した文化の痕跡に注意してみる必要もありそうです。熊野信仰霊場はそうした「痕跡」の例でもあります。

では、沖縄本島の代表的な霊場に限って紹介してみましょう。本島には「琉球八社」として古くから知られる神社があります。いずれも本来は「権現」を称し、近代初頭の神仏分離に至るまで真言宗寺院と一体の、典型的な神仏習合思想に基づいた聖地でした。「八社」および寺院とは、波上宮・護国寺、沖宮・臨海寺、天久宮・聖現寺、八幡宮・神徳寺、識名宮・神応寺、末吉宮・遍照寺（以上、那覇市）、普天間宮・神宮寺（宜野湾市）、金武宮・観音寺（国頭郡金武町）です。これらのうち、八幡宮以外の7か所までが熊野信仰の霊場で、多くが洞窟を伴っていることに特徴があります。私たちは波上宮、天久宮（聖現寺内）、普天間宮、金武宮（観音寺内）の4か所を訪ねましたが、いずれも洞窟のある霊場でした（金武宮・観音寺の洞窟は泡盛メーカーの貯蔵庫になっていました）。

洞窟との関係については、宗教学者の宮家準氏の見解によれば、本来他界への入口という観念があり、そこに本土からの信仰が習合したものと考えられるようです。

伝統的に沖縄と文化的関係の深かった奄美の徳之島にも、洞窟に宗教的な性格が与えられた喜念権現という神社があります。また、日本本土の修験道関係の霊場でも、洞窟がある例（奈良県大峰山や福岡県求菩提山、大分県国東半島など）が多々あります。洞窟に聖地としての意味付けがなされることは、かなり普遍的だったのかもしれません。

図1　波上宮と洞窟。

琉球八社に含まれる熊野信仰霊場の正確な成立時期はわかりませんが、宮家氏は15～16世紀頃のことと考えています。浄土宗の僧侶である袋中（たいちゅう）が執筆した『琉球神道記』（1605年）には、八社のうち、金武宮以外の七権現について「当国大社七処アリ。六処は倭ノ熊野権現。一処ハ八幡大菩薩ナリ」と記されていますから、この頃までには熊野信仰が伝播し、「大社」といわれるほどの霊場が形成されていたのでしょう。

補陀落渡海僧と沖縄

では、沖縄に熊野信仰を伝えたのは誰なのでしょうか。まず、沖縄出身の僧が日本本土から持ち帰るかたちでの伝播があります。例えば、『琉球神道記』の「末吉権現事」には、日本本土へ修行に行った鶴翁（かくおう）による勧請という記載があります。

また、補陀落渡海（ふだらくとかい）を志した本土の僧が沖縄にたどり着くという場合があり、私としてはこちらのほうに興味を感じます。補陀落渡海とは、南方の海上にあるといわれた観音浄土（補陀落山）へ往生しようという信仰から船出することをいいます。これに関しては、琉球王府が編纂した『琉球国由来記』（1713年）に収められた金峰山観音寺（金武宮・観音寺）の縁起が注目されます。日本本土の僧侶である日秀（にっしゅう）は、補陀落山を目指したものの、結局は沖縄に着き、観音寺を開いたというのです。

図2　普天間宮外観。

補陀落渡海の例は、記録や説話文学に散見されます。人数を断定することはできませんが、何人もの僧侶たちが南方へと旅立ったのです。行方不明になる例が多かったでしょうが、日秀と同様、沖縄に漂着して信仰文化の伝播に何らかの役割を果たした無名の僧たちがいたのではないかと思われます。

補陀落渡海の拠点となったのは、熊野那智山や室戸岬、足摺岬などでした。11世紀初頭には、阿波出身の賀登上人という僧侶が足摺岬から補陀落渡海のために船出をしたという説話もあります（『地蔵菩薩霊験記』）。このようなことを念頭に置くと、補陀落渡海の僧を媒介とした沖縄への熊野信仰の伝播も、阿波の歴史とかすかな接点を持っている可能性が考えられるのです。

なお、阿波は紀伊半島に近いためか、熊野信仰はかなりポピュラーなものでした（中世の熊野信仰関係史料も伝えられています）。したがって、賀登のような人物が登場する素地は十分にあったといえます。

おわりに

沖縄の熊野信仰について、簡単な紹介をしてきました。史料がほとんどないため、詳しいことは分からないままですが、背景にあった日本本土と沖縄の文化交流の一端をご理解いただければ幸いです。

（学芸員：歴史担当）

図3　普天間宮の洞窟。

野外博物館

中央構造線に沿う断層変位地形

博物館ニュースNo.23では、三野町芝生(しぼう)の"中央構造線"の露頭(ろとう)について紹介しましたが、今回は中央構造線にともなう断層変位地形の紹介です。

阿讃山地の南麓では、山地と平野部の境界を中央構造線が東西に走っており、それに沿って断層露頭や断層変位地形が観察できます。中でも、日開谷(ひがいだに)川と曽江谷(そえだに)川にはさまれた区間（市場町上喜来ー阿波町土柱）は、断層による変位地形が県下では最も顕著に認められるところです。

まず、日開谷川東岸の丘の上から西を眺めてみましょう。山地と平野部（扇状地）が直線的に画されており、その境界の上を徳島自動車道が走っているのが見えます（図1）。ここは、中央構造線の活断層系のうち、父尾(ちちお)断層が通っているところで、それが地形に反映されているのです。徳島自動車道ができる前は、もっとはっきりと見ることができました（図2）。

山地と平野部の直線的境界の東側への延長線上を注意深く見てみましょう。木の茂った緑の細い帯が東へのびているのが認められます。そこは、低位段丘を切る比高3～4mの段差があるため、宅地や田畑にならずに残されたところです。これは父尾断層の活動によってできた低断層崖だと考えられています（図3）。さらにその東方延長の沖積面の上で、徳島自動車道の工事の際（1991年）に、田んぼを掘って断面を調べるトレンチ調査が行われたことがありました。その際、沖積層を切る新しい断層が見つかりました（図4）。いっしょに発見された土器片の年代から、この断層は16世紀以降に発生した地震によるものだと考えられています。

その他、この地域では、山地から平野部に流れるほとんどの沢や河川が、父尾断層が通るあたりでクランク状に屈曲しているのが見られます。父尾断層は、第四紀に入ってからは右横ずれ運動をしており、河川の右ずれ屈曲は父尾断層の活動の集積の結果だと解釈されます。

両角芳郎（副館長：地学担当）

図1　日開谷川東岸の丘の上から西方を望む（1997年4月）。

図2　日開谷川東方上空から西方を望む（1990年11月）。

図3　低位段丘を切る低断層崖。左側は徳島自動車道工事で新しくできた土手（市場町上喜来）。

図4　トレンチ調査で現れた父尾断層の新しい活動の跡。右（南）側が1mあまり落ち込んでいる。

新着資料の紹介（1997年3月～5月）

歴史	軍事関係資料（購入）	地学	アンモナイトのレプリカ（購入）
民俗	藍染織品（購入）	植物	植物標本（寄贈）
美術工芸	松に旭・鶴図（購入）	動物	日本産淡水魚類標本（購入）

平成９年度第2回企画展

吉野川の自然

四国一の大河「吉野川」。その広がりは四国4県におよびます。とりわけ徳島県内では、県土の半分以上の面積が吉野川に関わっています。それだけに、私たちのくらしは吉野川と深く関わってきました。しかし、吉野川に関わったのは人だけでなく，川にくらす様々な生きものもいます。魚や鳥，カニや貝，川原の植物や昆虫…。この企画展では、吉野川にくらす生物を中心に、吉野川のおいたちや川漁と川舟などをご紹介します。

●会　期

1997年7月18日(金)～8月31日(日)

休館日：7月22日(火)･28日(月)、

8月4日(月)･11日(月)･18日(月)･25日(月)

●会　場

当館1階　企画展示室

●観覧料　（　）内は20名以上の団体

大人	200円	（160円）
高校・大学生	100円	（80円）
小・中学生	50円	（40円）

図1　中流域の景観（三野町）。
図2　中～下流域で、アユ漁に使われるカンドリ舟（阿波町）。
図3　河口域の景観（徳島市）。
図4　河口の泥干潟にすむトビハゼ（徳島市）。

●関連行事

(1) 記念シンポジウム「川と人の環境誌」

「つながり」をキーワードとして、流域としての川のつながり、川の生きものから見た川のつながり、川と人のつながりから、川のあるべき姿を探ります。

日時　8月10日(日)　午後1時～4時
会場　県立21世紀館イベントホール(入場無料)
講師　水野信彦(愛媛大学名誉教授:河川生態学)
　　澤井健二(摂南大学工学部教授:河川工学)
　　中村太士(北海道大学農学部助教授:流域論)
　　脇田健一(滋賀県立琵琶湖博物館主任学芸員:水辺の環境社会学)
司会　鎌田磨人（当館主任学芸員）

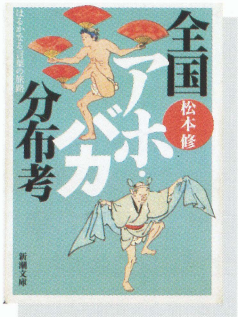
(2) 展示解説

日時　7月21日(月)　午後2時～3時
会場　企画展示室（観覧料必要）
講師　佐藤陽一（当館主任学芸員）

情報ボックス

本の紹介

全国アホ・バカ分布考
―はるかなる言葉の旅路―
松本修
￥720　新潮文庫



この本の執筆動機は、テレビ番組に寄せられた次のような質問に端を発しています。

「私は大阪生まれ、妻は東京出身です。二人で言い争う時、私は『アホ』といい、妻は『バカ』と言います。耳慣れない言葉でお互い大変に傷つきます。ふと東京と大阪の間に、『アホ』と『バカ』の境界線があるのではないか？と気づきました。地味な調査で申し訳ありませんが、東京からどこまでが『バカ』で、どこからが『アホ』なのか調べてください」

このような話を聞くと、ふと、そういえば、と興味がわいてくるのではないでしょうか。

番組にも、視聴者からの反響や情報が寄せられ、「アホ」と「バカ」だけでなく、それを意味する方言、「ハンカクサイ」「ゴシャッペ」「ダラ」「ホレ」「アンゴウ」等々が、各地に散らばっていることがわかっていきます。その後、日本全国各市町村へのアンケート調査まで行われ、京都を中心に何重もの円を描くことのできる、この方言の精密な分布図を完成するに至ります（図1参照。徳島県はどうなっているでしょうか？）。

この過程で著者は、だれもがいままで真剣に考えることのなかった、「アホ」「バカ」を意味する言葉について、徹底した追求を行っていきます。

結果、「アホ」「バカ」を指すそれぞれの言葉が何を源にどのように発生したかを明らかにし、また、これらの方言のほとんどが京都で流行しはじめ、各地に順に伝わっていったものであることを発見します。

さらに、日本人が生み出してきた「アホ」「バカ」の表現の中には、「痴」や「愚」、「無知」などを率直に意味するものはなく、婉曲的で穏やかな比喩の表現が多いことを指摘し、このような「つまらない言葉」の中に日本人のよき心性が潜んでいるのではないかとしています。

私は、民俗学とは、普段あたりまえに見逃している日常の生活に目を向け、その積み重ねから、背後にあるものの意味を考えるものだと思っています。この本は手軽に読めるだけでなく、民俗に興味のある人のお手本になるものだと思います。

庄武憲子（学芸員：民俗担当）

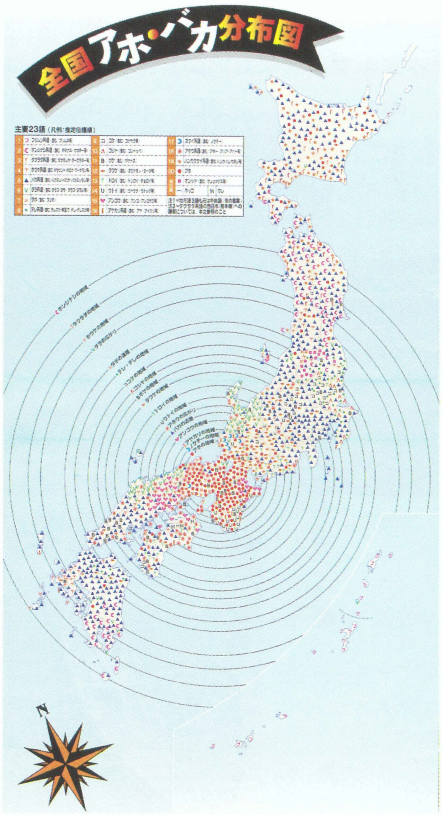


図1　全国アホ・バカ分布図
本のカバーの裏面についています。

Q 江戸時代に、元郡代による脱獄事件があったと聞きましたが…?

A 江戸時代の終わり頃、徳島城下町の牢獄から元代官が脱獄するという事件が、実際に起こりました。

脱獄した人物は、藩の直轄地の農民を治めた代官ではなく、これより強い権限を持ち、郡部の全農民を治めた郡代（ぐんだい）を務めたことがありました。郡代は、藩の中できわめて重要な役職でした。

このように重要な役職にいた人物が、なぜ投獄されたのでしょうか？

事件は、今からおよそ190年前に遡（さかのぼ）ります。徳島藩では、毎年増え続ける財政赤字の対策として、18世紀後半頃から、農民の年貢負担を一段と厳しくしていきました。

こうした中で、海部郡代に就任したのが、佐和滝三郎（さわたきさぶろう）でした。彼は、1799年（寛政11）から、6年間郡代を務めました。しかし、彼の赴任中、農民約180人が土佐国（現在の高知県）に逃亡するという、大きな百姓一揆が発生しました。一揆は、彼が実施した「盆撰（ぼんえ）り」という年貢米の取り立てが原因であったといわれます。それは、良質の年貢米を取り立てるため、米を盆に入れ良質の米だけを一粒ずつ選別させるという方法です。一揆について、徹底した藩の調査が行われた結果、逆に郡代自身が数々の不正や勝手気ままな行為を数多く行ったことが明らかにされました。そのため彼は、ただちに役職を解かれ、武士には適用されない投獄という、きわめて厳しい処分を受け、家は断絶しました。ところが彼は、まもなく城下の牢から脱獄するという、考えられない暴挙に出たのです（図1・2）。彼には、何らかの激しい憤（いきどお）りがあったのかも知れません。この時の手配書からは、藩により彼の殺害が認められていたことが明らかになります（図3）。彼は、数日城下に潜んでいたようですが、まもなく現在の徳島市福島にある慈光寺（じこうじ）の境内で捕えられ、のち牢死したと伝えられます。

このように、藩の重要な役職を務めた人物が脱獄したという事件は、ほとんど他に例がみられないでしょう。

山川浩實（人文課長：歴史担当）

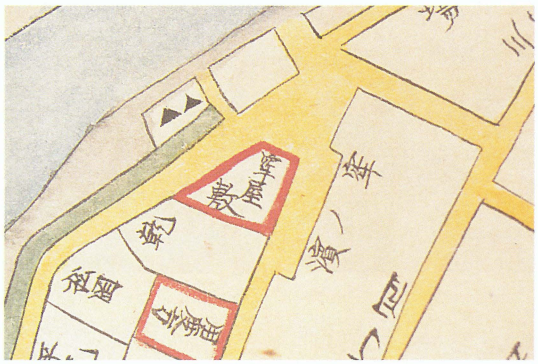


図1　元郡代が脱獄した徳島城下の塀裏牢（塀裏牢（へうらろう））（「徳島御城下絵図」当館蔵）。

図2　塀裏牢跡（徳島市南内町2丁目）。

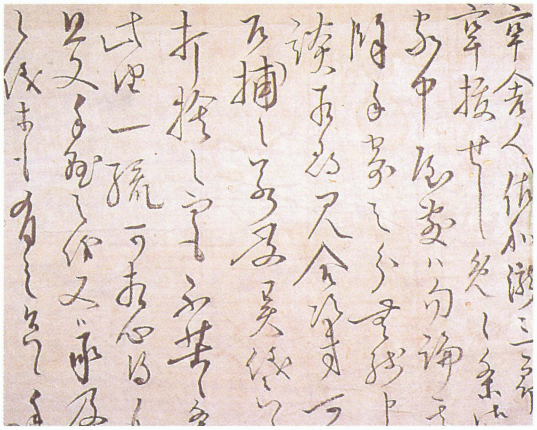


図3　「佐和滝三郎手配書」の一部（三木ガーデン歴史資料館蔵）。

7月から9月までの博物館普及行事

あなたも参加してみませんか？

シリーズ	行　　事　　名	実施日	実施時間	対象（人数）
野外自然かんさつ	夜の雑木林	7月19日(土)	19：30～21：30	小学生から一般（30名）
	水生昆虫のかんさつ	8月 2日(土)	10：00～12：00	小学生から一般（30名）
	鳴く虫のかんさつ	9月13日(土)	19：00～21：00	小学生から一般（30名）
	鉱物さがし	9月21日(日)	13：00～16：00	小学生から一般（40名）
	河口のいきもの	9月28日(日)	9：30～11：30	小学生から一般（50名）
土曜講座	※幕末をかけぬけた男たち・新撰組	7月12日(土)	14：00～15：00	小学生から一般（50名）
	※生きもののくらし	8月 9日(土)	14：00～15：00	小学生から一般（50名）
	※土器製塩のはなし	9月13日(土)	14：00～15：00	小学生から一般（50名）
室内実習	電子顕微鏡で化石を見よう	7月13日(日)	10：00～12：00 13：00～15：00	小学生から一般 午前の部・午後の部の2回（各10名）
	植物標本のつくり方	7月20日(日)	13：00～16：00	小学生から一般（30名）
	淡水魚調査法講座（魚の名前調べ）	8月 3日(日)	13：00～16：00	小学生から一般（30名）
	かんたんな貝の標本のつくりかた	8月16日(土)	14：00～16：00	小学生から一般（40名）
	植物の名前の調べ方	8月17日(日)	13：00～16：00	小学生から一般（30名）
	※標本の名前を調べる会	8月26日(火)	10：00～16：00	小学生から一般（植物のみ）
	※標本の名前を調べる会	8月27日(水)	10：00～16：00	小学生から一般（動物・植物・化石・岩石/鉱物）
	科学の目でみる文化財	9月14日(日)	13：00～16：00	小学5年生から一般（20名）
体験学習	火おこし	7月27日(日)	10：00～12：00	小学生から一般（30名）小学生は保護者同伴
歴史散歩	国府町の遺跡	8月20日(水)	13：30～16：00	小学生から一般（50名）
	用水探検	9月 7日(日)	10：00～14：00	小学生から一般（20名）
企画展関連行事	※展示解説	7月21日(月)	14：00～15：00	企画展「吉野川の自然」観覧料必要（50名）
	※シンポジウム「川と人の環境誌」	8月10日(日)	13：00～16：00	小学生から一般（300名）
移動博物館	※講座「阿波の歴史」④「漂着物が語る南の島からのメッセージ」「県南の古墳文化」	7月27日(日)	13：00～15：30	小学5年生から一般（100名） 海南文化館（会場）

●※は申し込み不要です。その他は往復はがきでお申し込みください。（各行事の1カ月前から10日前までに届くように）
●くわしいことは博物館にお問い合わせください。

★普及行事としては初の試みとして、「移動博物館」を行っています。これは、徳島市内まで出てくるのが大変だという方々のために、博物館から学芸員が出かけて行き、阿波の歴史などの話題をお話するというものです。今年度は、海南町教育委員会のご協力により、海南文化館を会場に、4月から7月までの間、毎月1回開催しています。1回目は4月27日（日）に実施し、38名の参加がありました。今後も、県内のいろいろな場所に出向いていきたいと考えていますので、お近くで開催される時には、ぜひふるってご参加ください。

★毎年希望者が多い行事のひとつに「磯のいきもの」があります。今年はたくさんの方に参加していただくために、4月27日と5月11日の2回行いました。場所は鳴門の竜宮の磯で、72名と43名という参加者でした。大きなアメフラシやイソギンチャクなどを見つけ、子供たちは大喜びでした。2日間ともよい天気に恵まれ、楽しいひとときを過ごすことができました。

磯のいきもの

博物館ニュース　No. 27

発行年月日　1997年7月1日
編集・発行　徳島県立博物館
〒770徳島市八万町向寺山　☎0886-68-3636